慰霊の日 人形に託す記憶

写真は朝日 21 日夕刊「復帰 50 年 沖縄戦」。今日 6 月 23 日は慰霊の日なので、途中まで紹介したい。

慰霊の日 人形に託す記憶

「戦友よ許してくれ」贈り主は元日本兵

糸数壕 アブチガマ

生き延びた体験 没後は娘が語り継ぐ

ひな祭りの風習がなかった沖縄県で、季節外れのひな人形が 6 月 6 日から、南城市の百名小学校に並んでいる。作り手は元日本兵で、現在の愛知県北名古屋市出身の故・日比野勝弘さん。米軍との激しい戦闘があった沖縄戦を生き延び、戦後は故郷で人形職人となった。2009 年に 85 歳で死去するまで、沖縄を少なくとも 110 回訪れた。晩年を撮影した動画が残されている。震える声で叫ぶ。「おーい、きょうも来たぞ。戦友よ。許してくれえ」生涯忘れられなかった残酷な沖縄戦。沖縄の人たちとの出会い。日比野さんの様々な思いが宿る人形は 1980 年に地元に贈られたものだ。戦没者らを悼む 23 日の「慰霊の日」に向け、飾られる。

45 年 5 月 2 日、日比野さんは本島中部の安波茶（現・浦添市）付近で、右腕などを負傷した。野戦病院を転々とし、百名小近くの地下の「糸数アブチガマ」に運ばれた。長さ 270㍍もある巨大な洞窟で、千人が収容されていた。だが直後、軍は本島南部で持久戦に持ち込もうとガマからの撤収を命じた。破傷風でけいれんする日比野さんら重傷兵約 150 人は置き去りにされた。負傷兵は次々に青酸カリで自決していった。日比野さんは飢えと渇きと激痛に耐えた。ようやくガマの入り口にたどり着くと、そこには反撃に備えるとして食料が大量に保管され、監視兵までいた。「見捨てられた人間に、やる米はない」。監視兵は言った。

ガマには避難してきた住民約 50 人もいた。同情した住民から自分たちのわずかな食べ物を分け与えてもらい、命をつなぐ。兵士も住民も降伏は許されなかった。米軍に投降したのは、終戦後の 8 月 22 日。生き残った負傷兵は 10 人ほどになっていた。46 月 1 月に復員したが、心は休まらなかった。戦友の死を遺族に伝えると必ず言われた。「あなたはどちらへ逃げて助かりましたか」。地獄を生き抜いたことが、責められた。その後は仕事に打ち込んだが、沖縄が忘れられなかった。米軍統治下の 61 年、戦後初めて沖縄を訪れた。

家族は心配した。沖縄では旧日本軍に対し、強い反発がある。地上戦に巻き込まれ、県民の 4 人に 1 人が犠牲になっている。だがあのガマがあった糸数は、違った。「患者の兵隊さんじゃないか」。集落で声をかけられ、住民が集まってきた。公民館では話し足りず、家にも招き入れられた。住民にとっては攻撃と監視の目を盗み、食料を分け合った仲間だった。この時から日比野さんの沖縄通いが始まる。

（2022 年 6 月 23 日）